

最 新

唱 歌 教 科 書

(伴 奏 附)

# 田 植

(スコットランド民謡)

*Allegro marcato.*

二ミチマールーワカバノシゲールルーピナニハタ  
二ちちーはーあににおもろーさもーうたひてう

ウーエノースゲーガサーズーシキーウタゴエモ  
れーじくーたのーじくーうゑーだるーたまなへゆ

ズンチーヌラスリモーミクニノーミタメンウ  
だんけきーみのスリなーいまよりにみするかは

ターピテーウエーヨヤーヌゲーメモータダシク  
ーにーち(ハ)ーはるーよつーゆのーしーらたま

(コノ Scotland ノ旋律ハ Burch ノ「美しきエレン」中ニモ引用セラル)

# 螢

(本曲ハ巻頭ノ春の曙トモニ Weber ノ原作ニヨル)

*Andante con moto.*

一ノキバキヨキシユーフヅキ  
二はくうはれしな一つのよ

ヤドスツユカホタタルピ  
かにはすなけるたなもか

ミツカニリカチゲチウツシテ  
ちかにりかちがちひかするは

ハカゲスズシミジカヨ  
ほたるのみにみにぶかなり

卒業の友を送る

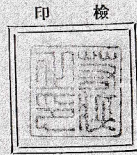
mf

トソロロニ  
モヨハシ  
にノ  
ゼのキ  
カニ  
タヒタ  
アツア  
シキシ  
ノキン  
キカナ  
ニハ  
ニハ

ルカチ  
アミタ  
ハチコ  
モヨロ  
トシミ  
イモキ  
ニヨバ  
コロラ  
コヒア  
ヤヨモ  
イモリ  
イモチ  
テシキ  
ミにケ  
ゲレズ  
ハナシ  
メロ

ハハ  
イモタ  
ハハ  
イカオ  
ミハニ  
キリカ  
ノハ  
ルミヒ  
サモ  
カオ  
キモ  
シシ  
ニツリ  
ヤダハ  
アハカ

昭和貳年三月二十日印刷  
昭和貳年四月一日發行



不許  
複製

編纂者 若狭萬次郎

印刷者 山中壽一

印刷所 大阪市東區北濱三丁目二〇番地ノ一  
山中金龍堂

發行所 大阪市西區北堀江通一丁目  
日本樂器製造株式會社

代表者 刀原四郎

定價金壹圓五十錢

○落花

ひらひら ひらと 散るよ  
いづこにゆくらん さくら花  
語らず いはず  
流れに うかびて

ゆくか。

○田植

犬童 球溪

一、新緑の若葉の茂れる鄙には

田植の菅笠涼しき歌聲

裳裾をぬらすも御國のみ爲ぞ

歌ひて植わよや筋目も正しく。

二、父母兄弟もろとも歌ひて

嬉しく楽しく植わたる玉苗

豊けきみのりを今より見するか

葉毎に宿せる夜露の白玉。

○螢

一、軒端 きよき 夕月  
宿す 露か 螢火

水に 影を うつつして

葉影 涼し 短夜。

二、白雨 はれし 夏の夜

蛙 なける 田面を

ちかり ちかり 光かるは

螢の やみに 飛ぶなり。

○夏の黄昏

山崎 紫泉

一、青葉若葉の 風そよぐ

小川の堤にさまよへば

ゆかしき香 ホロ／＼と

夕やみもれてながれ来る

二、かすけきみ空の星かげに

螢のかがり火うつろひて

笑ふや やさし卵の花の

香るやゆかし夏のよひ。

○湖上の月

一、浮べし小舟の棹をおきて

舳たゞき唱歌うたへば

其聲遙げく空にひゞき

雲居の月にも通ひゆかん。

躍れる小魚のかけも見にて

鏡と見する湖の面に

黄金の波を千々に砕く

二、又なき良夜と笛をとりて

好める曲調月にふけば

其音は清けく四方にひびき

岸べの村にも通ひ行かん

操つる水棹の雫おちて

鏡と見する湖の面に

白玉真玉千々に砕く。

○夏の夜

一、なはてそひて 風は吹き

青葉しげり 香りみつ

仰ぐほるか 色もこく

瑠璃のみ空 雲はたへ

空にみつる 星はみな

きららきらら ひかるなり

涼しき夜夏は来ぬ たのしき短夜や

夜あそぶ夏は来ぬ たのしめ夏の夜

二、水はみちて 川に田に

うたふ蛙 ふしもよし

雲井の夜に なきてとぶ

聲もゆかし ほどゝぎす

たびのやぎに 夢をたち

ほどゝたゞく くひなごり

おもしろき調べなり 楽しき夏の夜や

おもしろの夏は来ぬ 楽しめ夏の夜。

○夜の歌

犬童 球溪

一、夜の帷あたりをこめて

月かげ幽に木の間をより来る

静けき夜や

遠くひゞく妙なる小箏

誰にきけよの誰れの調べか。

二、里も森も静に更けて

星かげきら／＼み空にまたゞく

淋しき夜や

遠き彼方笛の音ひゞく

誰れにきけよの誰れの調べか。

○故郷の山河

一、麗朗の日かげに花は咲けど

故郷思へば心わびし

父母兄弟つがはなきか

夢にも見ゆるよ故郷の小山

名残を惜しみて別れし春は

再び此身にめぐり来る

何れの時にか事成し遂げて

戀しき山河 馴れにし山河

我は訪はん。

二、み空の月かげ清くすめど

故郷思へば眼曇る

姉妹友がきつつがはなきか

夢にも浮ぶよ故郷の小川

我家を離れて幾年月を

さすらふ此身に秋は来る

何れの時にか學業を終へて

戀しき山河 馴れにし山河

○波路の彼方

犬童 球溪

一、黄金色そめし 遙けき海原

静かに暮れそめて 夕日は沈むか

思へばなつかしや 波路の彼方の。

二、心はこばさや わが胸しら波

戀しきふるさとの 母ます磯邊に

思へばなつかしや 波路の彼方の。